

第2回 子どもと親子の活動・交流拠点整備検討委員会 議事概要

日時：令和3年8月3日（火）13：30～

場所：四日市市総合会館8階 第2会議室

1 開会

2 議事等

【委員長】

事務局から事項書の（1）第1回の振り返りについて、報告いただきたい。

【事務局】

6月18日の整備検討委員会では、笹川地区の紹介、それから笹川西小学校跡地と笹川西公園の再編に関する説明と、本市の総合計画において今後10年間で取り組む二つ目の全市的な子育て拠点の整備が、この再編案の中で検討されていることを紹介した。

その後、先進地視察の紹介をしてから、次なる全市的な子育て拠点はどんな施設がいいか、どんな機能があったらいいかについて、皆さんから意見をいただいた。

その際の主な意見として、雨でも遊べる施設がいい。駐車場の台数があったほうがいい。施設の中から外が見渡せる施設がいい。外は芝生がいい。昼間は小さい子の遊び場として、夕方は子どもたちが卓球やバドミントンができる場のように、一つの部屋を幾つかの用途に使えるようにしたい。防犯を含め、安全・安心に遊べる施設がいい。避難所としての機能を入れてほしい。親子で使えるトイレがあるといい。保護者もくつろげるスペースがあるといい。プレーパークのようなものが欲しいといったものがあった。

プレーパークについては、公園全体に関わってくることなので、市街地整備・公園課に相談した。笹川西公園から1キロ圏内に南部丘陵公園という大きな公園がある。（スライドで紹介する。）

南部丘陵公園は、大きな道路を隔てて北ゾーンと南ゾーンに分かれており、市内最大規模の公園。大型遊具、少し大きな子が遊べる大型の滑り台、自然を感じることでできる広

場、散策路、昆虫観察ができるビオトープ、動物とふれあえる小動物園、といった子どもだけでなく大人も楽しめる自然あふれる公園。

こうした公園があることを踏まえ、プレーパークとしての活動は、子育て施設から離れてしまうが、サテライト的な活動の場として、この南部丘陵公園で活動していただけるのではないかという助言があった。

本市としても、子育て施設の周りは、乳幼児とその保護者が安全に利用できる園庭のほが利用しやすいのではないかと、フラットな芝生とかタイルなど、様々なイベントに活用しやすい形の広場にして、笹川西公園と南部丘陵公園は少し機能を分けてやっていったほうがいいのではないかと考えた。

また、プレーパークには指導員が必要で、施設規模に見合うスタッフを今回配置するのは難しいことなど、総合的に検討した結果、今回の計画としては、プレーパークは見送らせていただくこととした。

【委員長】

南部丘陵公園まで移動すると、どれくらいかかるか。

【委員】

徒歩で15分ほどかかる。

【委員】

子どもを連れて移動しようと思うと、15分では難しい。

【委員長】

それぞれ機能を持っていると、今説明があったので、もう少しジョイントできるかと思う。

構想ができれば、それを子ども・子育て会議に諮るのか。結果として報告する必要はあるか。

【事務局】

ある程度形が見えてきたら報告する見込み。

【委員長】

できればリンクさせたほうが、いろいろ深められるのではないかと感じた。

(2) 拠点整備の基本的な考え方を事務局から、説明をいただきたい。

【事務局】

市民ニーズを把握するために、7月にこども子育て交流プラザ、橋北子育て支援センター、塩浜子育て支援センターを利用している保護者に対してアンケートを実施した。

平日の午前中に実施したため回答者のほとんどは女性、年齢は、約7割の方が30代、施設の利用頻度は約6割の方がリピーターで、ほぼ毎日という方もいた。

今後やってみたいこととしては、「定期的に開催している親子向けのイベントに参加したい」という方が最も多く、「自由に外の広場とか園庭で遊びたい」という方が2番目に多い。

部屋の大きさについては、どの部屋についても「今の大きさでちょうどいい」という回答が一番多かった。

こども子育て交流プラザの乳幼児専用スペースは、この会議室（50㎡）とだいたい同じ大きさ。利用人数からすると、少し小さいが、すぐ隣の多目的ホールとつながっていて、そちらでも自由に遊ぶことができるため狭さを感じない。隣接する多目的ホールは、16メートル×14メートルあり、小学生たちは、そこでボール遊びやバドミントンなどをしている。

子育て支援センターは、教室サイズの部屋と約100㎡のホールがある。コロナ禍ということもあり、1部屋に入る人数を制限しているため、ちょうどいいという回答が多かったと推測する一方で、約2割が「もう少し大きい部屋がいい」という回答だった。

「どんな部屋があったらいいか」という質問に対しては、「体を動かせる、運動ができる部屋があったらいい」が一番多く、次が乳幼児専用のスペース、親子トイレが希望としては多かった。

調理室と会議室については、現在の子育て支援センターに整備されていないこともあり、欲しいという声は上がってこなかった。

開館日や開館時間の結果は、「平日のみ」、「土曜日や日曜日も開いて欲しい」が、多かった。祝日の希望は多くなかった。開館時間については、夕方までが一番多かった。

「大きな遊具が欲しいか」について、「無料の大型遊具が欲しい」が大半。「有料でもいい

いので大きなショッピングセンターにあるような、多彩な大型遊具が欲しい」といった声も一部あった。

続いて、7月26日（月）にワークショップを実施し、市民活動団体の関係者、保育学科の学生、こども子育て交流プラザのスタッフ、保育園の保育士、児童館のスタッフ、子育てコンシェルジュなど計11名2グループに分かれて、拠点施設にあってほしい機能や設備について、意見をいただいた。

スタッフが中心のワークショップだったこともあり、現在の施設の不具合、園庭との関係、外国籍の方が多き地区ならではの工夫等について、意見をいただいた。

頂戴した合計99の意見から、いくつか紹介すると、「天候に関わらず活動できる屋外スペースを備える」。「今の時期のように、大変暑いときでも、少し外で遊べて、多少の雨でも遊べるような、屋根のあるようなところが欲しい」。それから、「子どもや保護者、職員が相互に目を合わせられる空間をしつらえる」、「屋内外を連続的に使う」、「不審者対策等の安全対策に抜かりがない」、「災害時に子育てファミリーの特性に即した避難所となる」などの意見があった。

この子育てファミリーの特性を補足すると、双子の親や子育ての経験者が多かったこともあり、「避難所の中で子どもが泣いてしまったり、障害のある子が走り回ったり、皆さんに迷惑をかけるようで、保護者としては、少し居づらい」。また「授乳やおむつを替えるときは、大勢の方がいるところでは、やりにくい」。また、「避難所の中で、子育て世代とそれ以外の人たちが分かれているほうが、相互にとって良いのではないか」という意見もあった。

学生からは、「これから子どもを持つことを考えている人とか、保育学生、看護学生などが気軽に立ち寄れる施設であって欲しい」、「学生や高齢者、国籍が異なる住民との交流ができる施設がいい」という意見が出た。

駐車場に関しては、「駐車場から雨に濡れずに施設に来られるような、四日市市の総合体育館の駐車場の通路のような、歩くところに屋根があるようにして欲しい」等たくさんの意見が出た。

また、笹川地区にバスで行くと、とても高いという話から「子どもだけでアクセスできるような安価なバスの料金を設定して欲しい」という意見もあった。また、「南部丘陵公園や、あすなろう鉄道などを結ぶ送迎バスがあるといい」、「コロナ禍ということもあるし、手洗いの習慣が身についてきたので、各部屋や外遊びの後に、すぐ手洗いができるような

場所が欲しい」という意見もあった。

トイレについても、たくさん意見が出て、「幼児用のトイレが欲しい」、「男子トイレ、女子トイレともに、おむつ替えスペースや子どもの着替えをさせられるスペースが欲しい」、「外遊びのために、公園の利用者が使えるきれいなトイレが欲しい」。これについては、「トイレに入っているときは中が見えなくなり、トイレから出ると透けるようになる、四日市にないような、いいものにして欲しい」という意見も出た。

これ以外にも、「すぐに使わない着替えなどの荷物を預けるリターン式ロッカー、女性だけが利用できる授乳室、男性も女性も共に使える調乳室、ベビーカー置き場などが欲しい」。

「車で施設に来るときに、ベビーカーにたくさんの荷物を載せているので、ベビーカーを置く場所が欲しい。ただし、ベビーカーに荷物を置きっぱなしにできないのでロッカーも欲しい」。

「子どもは決まった時間にご飯が食べられないこともあるので、好きな時間にご飯が食べられる食堂とか場所があるといい。コロナ禍なので支援センターやこども子育て交流プラザでは、ご飯が食べられないようになっているが、もし飲食が復活すれば時間制限や昼休みだけでなく、いつでも食べられるようにして欲しい」。

「保育所等、待機児童がいる共働き世帯などに必要な一時保育を提供してほしい」。

「外国籍の方でも利用しやすいよう、多言語、イラスト、ピクトグラム等のサインがあって欲しい」。

「卓球やバドミントン、ドッジボールなど、子どもが思い切り体を動かせる場所が欲しい」。

「未就園児、在園児に限らず、0歳から6歳くらいの未就学児が、小学生などに遠慮せずに自由に遊べるエリアが欲しい」。

「赤ちゃんが遊ぶエリアはクッションマットにして欲しい」。

こけても安全ということと、雨上がりに地面がどろどろのところでは遊ばせるのではなく、整地されているところであれば雨上がりでも遊ばせやすいのではないかという話の中で出てきた意見として、「外の遊び場に鈴鹿サーキットや四日市のゆめくじらにもあるような地面が柔らかい感じのクッション地面を取り入れて欲しい」。

子どもたち同士でいざこざが起きた時に、気持ちを落ち着ける場所として「子どもが気持ちをクールダウンできる場所が欲しい」。

「子どもを連れて毎回、利用時に名前や連絡先を記入するのは大変なので、入退室管理

システムのようなものを導入して簡単に利用できるようにしてほしい」などたくさんの意見を頂戴した。

今後は、夏休みに入ったので、児童館やこども子育て交流プラザを利用する小学生や、土日に利用するお父さん、お母さん等にヒアリングを予定している。

【委員長】

アンケート調査の結果について、回答者は合計60でいいか。

【事務局】

そのとおり。

【委員】

利用頻度がとても多い。ほぼ毎日という人も8%もいる。

橋北子育て支援センター、塩浜子育て支援センターは、どちらも平日しか開いていないのに週3日という方は、ほぼ毎日の利用になる。単に子どもと遊びに行く場ではなくて、生活の場になっている。週に1日、遊びに行く遊び場なのか、生活の場なのかで、イメージは変わってくる。

【委員長】

基本的には、利用したいと思う人たちが自由に使えることが前提だが、新しい施設についても、非常に利用頻度が高いという性質を持つ前提で、受け入れ態勢も整えていく必要がある。

施設での遊びについて、利用したいという人たちの気持ちが第一だと思っていたので、施設側で親子向けのイベントや講座を組まずに、親子でのんびりするとか、他のお母さんたちと話をするといったことが子育て支援では大事だと思っていた。ところがアンケートを見てみると、施設側によるイベントの企画があるほうが比較的参加しやすく、イベントの実施が望まれていることが分かった。

【委員】

四日市市は意外と県外から来ている方が多く、最初の訪問のきっかけとして、ちょっと

したイベントがあるといい。

子どもを産んだからといって急にお母さんになれるわけではない。何か子育てについて勉強できるようなイベントに参加して、ベテランのお母さんと話したりすることが、その施設に長く通って遊んだりすることにつながると思う。

【委員】

お母さんがイベント参加のために複数の子育て支援センターを利用していると、子どもが落ち着かない。そのため、どこの子育て支援センターも、イベントは1回利用した上で直接申し込むという形でやっている。

【委員】

転勤族が多く、土地勘がないし、よくわからないので、イベントを通じて仲間づくりをしたいというのが四日市市の特性なのかもしれない。ノンプログラムとプログラムのバランス感を考えていく必要がある。

四日市市全体の子育て支援を俯瞰しながら、施設毎の特徴や特色があった方が、市民としてもいい。

子育てジプシーと言われる、子育てのイベントだけを渡り歩く人たちは、市が子育て支援を通してどんな保護者にするかという、ランドデザインがないと育ちにくい。

【委員】

四日市市の中の笹川でつくるという特性を生かすのであれば、利便性を高めて市内の方がたくさん集まれるような仕組みも必要だろう。

今の保護者は、自分が子どものときに子育て支援センターがなかった世代で、何をしている場所か、どこに何があるのかを知らない人もたくさんいるので、宣伝もたくさんした方がいい。

【委員長】

周知や宣伝は重要だろう。施設の特徴や利用できることを多くの人を知ってくると、重要な施設となっていく。部屋の傾向としては、運動ができ、親子でくつろげるところは絶対に必要である。

【委員】

ハード面で、親子トイレは多胎児・双子用のベビーカーがドアを通れたり、クランクを回ることができるなど、いろいろな方が利用しやすい本当のバリアフリーを考えてほしい。

【委員長】

避難場所としての機能も重要だろう。

もう少し市民に意見を聞きたいと思うが、ここに出ている人たち以外にも、意見を聞く機会はまだあるのか。

【事務局】

土日のこども子育て交流プラザの利用者の意見を聞く。新たな施設では夕方から、地元小学生が利用することを想定しており、児童館でも意見を聞く予定である。

【委員】

公共の施設である以上、避難場所の視点はとても大事だと思うが、いろいろな機能を乗せていくと何の施設かわからなくなる。

例えば、避難場所を子育てに特化するのであれば、福祉避難所の概念も出てくる中で、子ども・子育て、あるいは母子とか妊産婦さんとか乳幼児に特化したものが市内に一つ、二つあってもいいのではないか。また、先ほどのアピール不足という話に関連させて、災害を切口にした発信をしていけば、新しい施設の周知につながるのではないか。

【委員長】

そのとおりだと思う。東日本大震災のとき、保育園、幼稚園の保育士が非常に大変な思いをした。特に子育てをしている人たちに特化した施設であることが特徴として出てくると、利用する側にも理解しやすいのではないか。

また、最近では、子どもたちに対する犯罪も非常に深刻で、防犯や見守りの視点として大人たちの目が行き届くような建物がいい。デザインや見栄えが良くても視界が非常に悪い建物もある。

何かあったときに、ある一点に保育士が立つと全体が見渡せる園が非常によかった。ま

た、向かい合った保育室が見えて、四角い園庭を囲んでいるつくりというのも、面白いと思う。

【委員】

災害が起きると保護者も不安定になるし、子どもの方も不安定さが増すと思う。特に、発達に障害のある子は、避難所で大勢の大人といると、ただならぬ状況を感じとってさらにストレスを感じてしまう。だから、いつも遊んでいる場所が避難所になれば、子どもたちの心も落ち着くのではないか。

もし、子どもに特化した避難場所になるのであれば、おむつやミルクもあらかじめ備蓄できるとよい。

【委員】

公共機関というのは長い目で継続していくとなると、市民サービスも大切だが、運営側のランニングコストなどの財政的な、あるいは人的な負担とのバランス感は常に勘案が必要である。

開室日数などもつくる時に無理しすぎないように、きちんと地域に根ざしたものになっていくことが必要だろう。

人気のある子育て支援施設では、市外の方が多く遊びに来るところも全国でみられる。観光施設と考えれば人気があるのはいいけれど、市民の税金を使っているところで市外の人利用があるのは市として難しいのではないか。

【委員長】

基本構想の骨子（案）の中で「子育て支援、相談が受けられる場」の、「子育て相談、情報提供」が大事である。

新施設がインフォメーションセンター（子育ての総合窓口）的な役割を果たしてくれると、利用者にもわかりやすくなる。

それぞれの施設がつくった広報紙を、ただ貼っていくのではなく、もっと機能的に、来た人にどんどん働きかけをする。

四日市市の子育ての情報はここが発信していく。また、こういう問題を抱えているときはここへ相談する、というような、子育て支援に関する施設の連携を取ることはできない

か。

【事務局】

こども未来課や、単独型の子育て支援センターには子育てコンシェルジュという子育て専門の相談員の配置をしている。新しい施設にも専門職員の配置を検討していく。

【委員長】

専門職員の配置が施設の大きな特徴になってもよい。

基本構想の骨子（案）にある、地球環境にやさしい施設整備も大事である。環境に関する機能を持たせることができるか具体的に考えていく必要がある。

【事務局】

新しく施設を考えていくのであれば、太陽光発電や蓄エネに関する設備を導入し、積極的な省エネ化を図っていく。それがランニングコストの軽減になり、災害時の備えの一つになると、四日市市環境部環境保全課から助言があった。

【委員長】

四日市公害について学校で習ったが、今は、よみがえったこの環境をアピールしていけるといい。

【委員】

他市事例として、名古屋市はロフト名古屋に子育て支援センター（ナディアパークのビジネスセンタービル6階内）がある。そこは壁一面に市内の子育て情報がきれいに並べて情報発信されている。

また、ビオトープがあったり、風車など動く仕組みが見えるなど工夫してある園もある。市のブランディングとして、新しい公共的な施設に、コストがかかるかもしれないが、SDGsや環境のものが子どもたちに見えたり、わかったりするようにして、子どもたちがそれに気付けるように備えるのもいい。

【委員長】

パソコンから情報をとれる環境にない方も実はいるので、誰もがきちんと情報を集められるように、パソコンを使える部屋や、情報を得られるスペースを確保するなどの配慮をするといい。

【委員】

施設のターゲットをどこに持ってくるかは難しい問題。あらかじめ決めておかないと、コンセプトもずれるしアピールもしにくくなる。

【委員】

旧笹川西小学校の敷地内に「すくすくの森」という児童にとっても人気のあった自然を生かした遊び場がある。タイヤと簡単なアスレチックしかないが、子どもたちにとっては思い出の場所である。今回笹川西小学校はすべて取り壊しと聞いているが、子育て施設の遊び場の一つにできないかという声が地元から上がっている。可能かどうかわからないが、検討課題の一つとして挙げてもらえないか。笹川の高齢化を防ぐために子育て世帯を呼び込みたいということで、全然関係のない地区から来てもらうことも一つだが、笹川地区の卒業生で、この近辺で子育てをしている方もたくさんいるので、思い出の場所としてそこを残してもらい、子育てをしていけるような環境になればいい。

前回、まん延防止の関係で中止になった、視察を実施できないか。全体の構想に関わることなので、市役所の関係部局の担当者にも、一緒に視察をして現場を見てほしい。

【事務局】

笹川西小学校の敷地内の「すくすくの森」については、学校跡地ということで、教育委員会の所管となる。

タイヤも老朽化しており、木もかなり大きいため、移設するとしてもいろいろ課題があると聞いている。こういった話があったことは、関係部局と共有させていただく。

【委員】

地域の方に愛される施設になるには、同じ形で受け継げなくても、象徴的なものや懐かしむことができるようなものにする工夫があるといいと思う。

テレビ番組の『大改造!! 劇的ビフォーアフター』では、新しくなったときに、以前のも

のをどこかに形を変えて置いている。あれは、大事なことだと思う。

【事務局】

前回の検討会議、ワークショップやアンケートでいろいろな意見を戴き、それを基にそれぞれの部屋の機能等について検討した内容を説明する。(基本構想 骨子 4 ページ)

「遊び機能」について、ダンスとか、卓球とか、バドミントンとか、ドッジボールができる多目的ホール(16メートル×14メートルぐらい)のスペースは確保したい。

部屋を希望どおりにいくつもつくることは難しいので、多目的ホールの一部を鏡張りにすることも考えている。また、発表会をする時に一段高い場所があるといいことから、普段は収納された壁から出てくるステージを用意したい。

ベビーマッサージやヨガができ親子で簡単な体操をするには、多目的ホールは広いので、ホールを2分割できるような仕組みとし、いろいろな遊び方ができるホールを用意したい。

「子育て支援ルーム」は、多目的ホールからは完全に独立して、未就学児の0歳から6歳ぐらいのお子さんが使うスペースとして考えている。現在の子育て支援センターは、0～1歳、または0～2歳ぐらいが主流で、それより大きい在園児は使えないので、兄弟姉妹で来ても使える場所を考えている。自由にままごとやブロックをして遊ぶ場所の他に、子どもたちが好きな隠れ家的なものを用意して、お絵描きをしたり、磁石を貼ったり、自由に遊べる場所として、子どもたちの想像力をかき立てる場を用意したい。

「学び・体験機能」について、お絵かき・習字・紙や木工の工作をしたり、科学実験をしたり、いろいろな体験と学びができる場として独立した工作室を用意したい。

「図書室」には、自由に本が読めるように、蔵書をたくさん用意したい。図書室とするか、スペースの一角に図書を配置して何かの部屋と一緒にするかを検討する。

「カルチャールーム」は、栄養士相談・離乳食相談・離乳食教室などで使えるように壁面に調理ができるIHの調理器やシンクを配置し、真ん中を普通のテーブルにすることで、独立した調理室ではなく多用途で使えるようにしたい。昇降式IHの調理器とシンクを導入すれば、小学生や車いすの方も使いやすくなると考えている。

「その他の部屋」として、ほかの子育て施設にはない特色のある部屋の整備を検討しており、カプラーームや楽器の演奏ができる部屋も含めて検討中である。

「子育て支援機能」の一時預かりについて、市内にある17園でアンケートを採ったものを基準とする。定員は3人から10人で平均すると6人ぐらいの子どもを預かっており、

保育士は平均すると約2人で、保育室は50平方メートル（7m×7m）ぐらいを使用していた。

一時預かりの利用者からは、1時間区切りの利用希望はあまり聞こえてこなかったが、ワークショップでは、「1日預けるほどではない用事のために数時間利用することで、お母さんたちが休息を取ることができる」という意見があったので、時間単位での利用に対応する。

それから、お母さんたちがいろいろな悩みを他人に聞かれずに相談ができる独立した個室の相談室を用意したい。

「クールダウンルーム」は、子どもがいろいろな話をしたり、ときには子どもが独りになつたりできる場所とする。

「交流機能」として、ご飯を食べたり、フリーで話をしたり、いつでも利用できる、交流の場としてミーティングフロアのような場所も用意したいと考えている。

【委員長】

過去の経験から考えると、子どもたちは決まったスペースで絵を描くよりも、そこから外れたところに絵を描くのが好きな傾向がある。特に室内に整備したものについて、最初は物珍しく利用するが使われなくなってしまうことがあり、自由度のある整備がいいと思う。また、運動をするのでも自分たちのしたいところで運動ができたりする空間があってもいい。

【委員】

施設の特徴という意味で、ソフトではなくハードでもいろいろと特徴の出し方がある。カプラも面白いと思う反面、『カプラの数』と『適切な指導』がセットになっていないと、遊び込むのはなかなか難しいと思う。

ソフトで特徴をどう出していくのか、舞鶴市の「あそびあむ」では多く保育の視点が入っていて、子どもたちが主体的に遊べるプログラムや環境構成をしているという意味で良い例だ。

一時預かりという保育サービスはとてもいいと思う。例えば今はもうないが、徳島市のそごうにあった「子育て安心ステーション」では、市がお金を負担して、2時間まで一時預かりが無料（週に1回まで、1回100円負担あり）だった。

市の姿勢として、一時預かりをどう位置付けるかで無償か有償を決めて、有償でやるなら時間利用になるのではないか。

食事の位置付けについて、長く滞在する場合と、1～2時間遊んで帰る場合では違うので、全体的なコンセプトと一致させる必要がある。

【委員長】

図書室はただ本を置いておけばいい訳でなく、子どもたちが利用しやすい、行ってみたいと思える魅力のあるスペースにする。子どもたち自身が本に興味を持ったり、静かに何かを考えたり、親と一緒に本を読んであげたりできると、夢があっていいと思う。

【委員】

全ての様子がかがえる開放的な空間はとても魅力的だ。一時預かりルームなどは完全に分けないといけないスペースだが、カプラーームなどは奥まったところにつくるのではなく、見えるところで、わかりやすく楽しいものとして置いてあるとみんなが遊ぶのではないかと思う。

【委員長】

常に活動的であることももちろん前提だが、子どもたちはそれぞれ違うので、次から次に、これでもかこれでもかと活動するというのは、子どもたちにとっても疲れるため、クールダウンルームなどでの何もしない時間も、子どもには大事だと思う。

各委員からの意見も参考に、第3回の検討会ではさらに具体的な計画の方向性を示して欲しい。

以上